

甲賀三郎探偵小説選Ⅱ
目次

真珠塔の秘密……………1

カナリヤの秘密……………10

*

気早の惣太の経験……………34

惣太の喧嘩……………45

惣太の幸運……………54

惣太の意外……………65

惣太の受難……………76

惣太の求婚……………87

惣太の嫌疑……………98

*

銀の煙草入	112
都会の一隅で	120
暗黒街の紳士	126
兇賊を恋した変装の女探偵	145
池畔の謎	163
ビルマの九官鳥	172
朔 <small>さく</small> 風 <small>ふう</small>	244
街にある港（一幕）	333
父・甲賀三郎の思い出（深草淑子）	347
【解題】 浜田知明	352

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

真珠塔の秘密

一

長い陰気な梅雨が漸く明けると、そこにはもう酷い暑さが待ち設けていた。さすが都大路も暫くは人通りが杜絶する真昼の静けさから、豆腐屋のラッパを合図に次第に都の騒しさに帰る夕暮時に、夕立のような喧しい蟬の声を浴びながら、私は上野の森を越えて、久し振りに桜木町の橋本敏を訪ねた。

親しい間とて、案内も乞わずにすぐ彼の書斎兼応接室の扉を叩いて中へ入ると、机に向つて何か考えていたらしい彼は入口へ首を捻じ向けながら、

「やあ、君か。久し振りだね。まあ掛け給え」

「昼間は暑くてとても出られないからね。上野の森は、しかし悪くはないね」

「上野といえは君、今度の展覧会の真珠塔だね」友は扇風器を私の方へ向けながら、「何か変わった事は聞かないかい」

「イヤ、いろいろ評判は聞くが変つた事は聞かないね。何か事件でも起つたのかね」

友は黙つて数葉の名刺を私に渡した。一枚は警視庁の高田警部の名刺で、「東洋真珠商会主下村豊造氏貴下に御依頼の件あり参上仕るべく何分宜しく願上候」と書いてあり、一枚は東洋真珠商会主下村豊造氏の名刺で、一枚は同製作部主任佐瀬龍之助と書かれていた。

「この二人が少し前に会いに来たそうだ」友は私の見終るのを俟つて云つた。「恰度僕が留守だったので、後ほど何うと云い置いて帰つたそうだよ」

先年東京××博覧会が開かれた時、その一館に有名なM真珠店が数十万円と銘打つて、一基の真珠塔を出陳して世人を驚かした事は、なお諸君の記憶に新なる所であろう。ところが本月から××省主催の美術工芸品展覧会が、上野竹の台に開催せられると、近來M真珠店に対抗して漸く頭角を現してきた東洋真珠商会は、先年のM商店の出品物を遙に凌駕する壮麗な真珠塔を出陳したのだった。

諸君も既に御承知の事と思うが、私の見た所では塔の

高さは約三尺、かの薬師寺の東塔を模したと云われ、三重であるが所謂裳階を有するので、ちよつと見ると六階に見える。各階尽く見事な真珠よりなり、殊に正面の階を登って塔内に入らんとする所に篋められているものは、大きさといひ形といひ光沢といひ世界にもまたあるまじき逸品で、塔の価格三十八万円というのものなるほどと思われる。展覧会開催以来新聞は随分この記事で賑わされたので、ある新聞によると、東洋商會はM商店の製作部の腕利の技師を買収して、この真珠塔を造らしめたのだといひ、ある新聞によると、その技師は不都合の廉があつて、M商店を放逐せられたのであるといふ事であつた。私は新聞で知り得たこういつた事実を、知つての限り友人に話した。

折柄鈴鈴が激しく鳴つて、書生が二人の紳士を伴つて入つて来た。

「私が橋本です」友は立ち上つて云つた。「こちらは友人の岡田君です」

「申し遅れまして」と五十恰好の楮ら顔で、でつぷり肥つた紳士は丁寧に礼をしながら、「私は下村でございます」

「私は佐瀬でございます」三十を少し越したかと思はれる頭髮を綺麗に分けた色白の背の高い紳士は云つた。

友は二人に椅子をすすめながら、

「どうも暑くなりまして。……して御要件は」

「それがその、ええ、ちと他聞を憚る事でございまして」

商會主は汗を拭き拭き、私の方を気にする様子だった。「その点は御心配に及びません。岡田君はいつも私と一緒に働いてくれる人で、私同様と御思い下さつて差支えありません」

「さようでございますか」と商會主は漸く落ち着いて、「実は何でございませう。今回私共が××省御主催の展覧會に出品いたしております真珠塔につきまして、誠に不思議な事が起りましたので、早速警視庁へ御相談に上りました所、あちらではそういう仕事は却つて貴君に御願ひ申すがよからうという事で、甚だ御迷惑ながら御依頼に上つた次第でございます。新聞ではいろいろに申しますが、別に私共はM商店に対抗して立つのどのとうい事はございませんが、私は元來こういう事が好きでございまして、東洋独特の工芸品として外国人に誇れるものを造りたいと、予々苦心をいたしておりましたわけでございます。ところが幸いに、こういう方面には非凡の腕前のある佐瀬君が来てくれましたので、今日どうやら人様の口にも上るような品が出来ましたのでございます」

商會主の語る所はこうであつた。六月の廿日はつかに展覽會が開かれて四、五日も経つた頃、恰度世間で真珠塔の噂が頂点に達していた時分である。商會に二人の客があつた。一人は外国人で、アメリカの富豪で東洋美術品の蒐集家マツカレーといい、一人は一見外国人かと思われる堂々たる日本紳士で、有名な代議士花野茂という名刺を示して商會主を驚かした。マツカレーは全然日本語に通じないようすで、日本紳士の方が流暢りゅうちやうなる英語で通訳したそうである。要件は近々娘が結婚するので、七月十日頃の汽船で帰るが、その贈物に例の真珠塔が欲しい、が値も高いし、それに会期中持ち帰る訳にも行くまいから、二週間以内に、八万円位であの模造品を造つてくれまいか、と云うのであつた。

商會主は佐瀬技師と相談の上、十万円で引受けることになつた。すると日本紳士が「どの位の程度まで似せる事が出来るか」と聞くので、佐瀬は、「どうしても、品が落ちますから、専門家にかかつては敵かたわないが、素人しやうとにならちよつと見別けのつかぬ程度に出来ましょう」と答えると、大変満足して、早速手附に二万円払い、なお期限を遅らしたり、真物ほんものと充分似ない時には破約するという条件を付けて、帰つて行つた。

それから佐瀬は二週間、専心にこの製作に従事して、

漸く注文通りのものを造り上げた。その間、期限の事で一回花野氏から電話があり、こちらからも一度電話をかけたが、留守であつた。

取引の日には早朝花野氏が来て出来栄できばえを見て大変喜び、早速残金を支払い自動車で帰つたのである。

それでこの仕事は無事にすんだ訳であるが、それから二、三日経つた今朝の事、佐瀬は展覽會場へ行つて、相変わらず自分の製作の前には人だかりの多いのを満足しながら、肩越しに真珠塔を一目見た途端、アツと思わず顔色を変えたそうである。

「全く今朝は驚きました」佐瀬は口を開いた。「思わず人を掻き分けて前へ出ました」

前へ出て能く見ると、一目見て直覺した通り、真珠塔はいつか模造品と置き換えられていた。

「素人方には少しも御分りにならないかも知れませんが、動かぬ証拠は、実は私が模造品を造ります際、数の都合上どうしても疵のあるのを一つ使わねばならないので、疵ひまじの蔭の眼のつかない所へ嵌めたのです」

「全く、私もその疵のある真珠の事を云われるまでは、どうしても置き換えられた事は信じられませんでした」

と商會主は口を添えた。

佐瀬は早速商會主を呼んで、取り敢えず守衛の所へ行

った。貴重品ばかりの所であるから、夜は特別に二人居て交代で不寝番をする事になっていたのである。

守衛は始めは中々云わなかったそうであるが、激しい詰問にとうとう白状した所によると、二日許り前の晩、夜中にガチャンと硝子の破れる音がしたので、ハツとして二人で詰所を飛び出すと、一人の曲者が将に明り取り窓から逃げ出す所で、その窓硝子を一枚落したのであった。太急ぎで入口を開けて外へ出た時には、既に逃走した後だった。場内を見ると、真珠塔がいつの間にか箱から出され、棚から一間許りの所に置かれていた。しかし外には何の被害もない様子なので、二人は相談の上、塔を箱の中に戻し、泥棒の這入ったことは隠す事にして、硝子の落ちたのは風の所為にして知らぬ顔をしていたのであった。

つまり守衛達は泥棒が未遂のまま逃げ出したものと思っていたのであるが、実は真物は既に運び去られた後で、これから偽物を運び入れんとした際に、何かの理由で泥棒はあわてて窓から逃げ出そうとして、守衛達に気付かれたのであった。

そこで商会主と佐瀬は展覧会の事務所にその事を届出でて、それから警視庁の方へ行つたのであるが、何分秘密を要する事だし、遂に橋本に依頼する事になったので

あった。

「陳列箱の鍵は平生誰が持っているのですか」

友は始めて口を開いた。

「二つありまして、一つは守衛、一つは私が持つております」佐瀬は答えた。

「塔の重量はどの位ですか」

「三貫五百目です、大理石の台がありますから」

「なるほど不思議な事件だ。宜しい御引受けしなう。まず現場と守衛を調べねばなりません」

商会主が喜んで佐瀬と共に辞去すると、やがて橋本は

警視庁へ電話を掛けた。

「モシモシ、高田君？ ええ例の件でね、ちよつと展覧会の夜間入場の便宜を計つてもらいたいんですよ。

え？ マッカレーは昨日帰国した？ 確かな人間だつて？ どうも真珠塔は買わないらしい、ホテルの給仕が日本人がスゴスゴと持つて帰るのを見た、ああそうですか。花野は偽名らしいって、そうでしょうなあ。何か花野氏と縁故のあるものらしいというんですか。ふん、そうそう、何でも大きな身体でちよつと外国人のようで、話も達者な奴らしい。いやどうも有難う。ええ直ぐ展覧会の方へ行きます。さようなら」

そう云つて電話を切ると、彼は私の方に向き直つた。

「どうだ君。一緒に現場へ来ないかね」

二二

夏の永い日ざしもはや傾いて、外はもう夕闇であつた。上野の山内は白く浮いて出る浴衣がけの涼みの男女の幾群かが、そぞろ歩きをしていた。

展覧会場では二人の守衛が待ち受けていた。幸い二人とも恰度先夜の宿直で、早速現場に案内してくれた。

場内はしんとして、夜間開場の設備がないので、広い会場の天井にただ二ヶ所、うす暗い電燈が鈍い光りを眠そうに投じているばかり。昼間満都の人気を集めて、看客の群が集うだけ、それだけ人気のない会場は一層静かなものであつた。守衛の一人は年頃六十以上の背の高い老人で、一人は軍人上りらしい丸々とした、頑丈そうな四十恰好の男で、いずれも頗る好人物らしく見えた。

問題の塔は正面入口のすぐ右側に、四方硝子張りの戸棚に収められ、夜目にもそのすべすべした豊麗な膚は清浄な色を放っていた。曲者の飛び出した窓は、地上から十五尺ばかりの高さに建物の周囲をとりまいて一連の明り取り窓の一つで、壁際に一列に並んだ陳列棚は高

さ九尺であるから、その頂部よりなお六尺の上に開かれている。

「そうです。私が見付けましたので」若い方の守衛は友の間に答えた。「恰度飛び出す所でした。ええ、どの入口にも鍵がかかっておりました。確かです。私共が入口を開けるのに手間取つていたものですから、曲者を逃がしてしまいました。私共が全で共謀かなんぞになつていするように思われますので甚だ残念ですが、どうしてあの塔をあの高い窓から運び出したのでしょうか」

友は窓の高さを目測したり、戸棚の周囲を丁寧調べたりした揚句、腕を組んで瞑想を始めた。この時こそ友の頭腦の最も働いている時である事を知っている私は黙つてそれを眺めていた。

「窓硝子の落ちた音が付いたというのは確かですか」友は突然に聞いた。

「確かです。破片が散つておりましたし、外に硝子のこわれた所はありませんでしたから」

友はまた深い瞑想に陥つた。やがて何か思いついた如く、守衛達に一礼して場外に出た。

山下の菊屋で夕食をした後、友は神田に行こうと云い出した。私は云うがままに彼について行つた。

[巻末エッセイ] 深草淑子（ふかくさ・よしこ）

旧姓春田。1925年8月13日、甲賀三郎の次女として渋谷に生まれる。42年、文化学院女学部卒業。2004年に初の著書『愛国者』（東洋出版）を上梓。

[解題] 浜田知明（はまだ・ともあき）

1958年、東京生まれ。千葉大学理学部物理学科卒業。探偵小説研究家。現在、校正業に従事。編書に「横溝正史探偵小説コレクション」及び「横溝正史自選集」（ともに出版芸術社）、共編著に『横溝正史研究』（戎光祥出版）。ルパン同好会会長、ROM（Revisit Old Mysteries）会員、神津恭介ファンクラブ会員、EQFC（Ellery Queen Fan Club）会員、小川範子に関する不定期個人紙「聖華」を作成発行。

こうが さぶろうたんていしやうせつせん
甲賀三郎探偵小説選Ⅱ

[論創ミステリ叢書 103]

2017年1月20日 初版第1刷印刷

2017年1月30日 初版第1刷発行

著者 甲賀三郎

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

©2017 Saburo Koga, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1568-8